

鮎の登れぬ滝 = = = 三州横山話より

前を流れる寒狭川に二ノ滝という滝があって、川の中央にある二つの岩のから水が溢れ落ちていて、絶えず物凄い響きをたてていましたが、ここから二町ほど下がったところに、鵜の頸と言う淵があって、大淵とも呼んでいますが、ここは竜宮へ通じているなどと言いました。



た。この淵と二ノ滝との間には、奇岩が重畳して、物凄いところでした。

夏、鮎が川下から登ってきて、この滝を上ることが出来ないため、これより上流には鮎はいませんが、昔上流の

二の滝は、長篠発電所の取水堰（花の木ダム）の本堤付近にあったと思われます。子供の頃（昭和30年ごろ）父親が「オイ！、二の滝に行くぞ」といって、大きなタモを持って、鱒をすきに來たのを覚えています。

岩の上からそっと覗くと、4・50cmの鱒が川隅の浅瀬に出ているので、逃げ道に網を当てておいて、石を投げたり中に入って嚇したりして網に追い込んだものでした。

段嶺に城のあったとき、城主が滝を破壊して鮎を誘おうと計ると、夢に竜神が現れて、段嶺に城のある限り、鮎を登らせる約束をして、滝の破壊を思い留まらせたと言って、段嶺に城のあった間は、上流にも鮎がいたなどと言いました。

明治の初め頃、付近の村の材木商が申し合わせてこの滝の破壊を計画すると、間もなくその人たちが病気になったり、死んだりしたので、竜神の祟りだと怖れて、滝の傍に、南無阿弥陀仏の文字を刻んで中止したと言いましたが、明治四十三年に、水力電気の工事のために破壊されて、昔の形はなくなりました。